

## 最終稿の掲載拒否について

2013年4月15日

上原正稔

一作家の連載最終稿がその作家にも知らされず、読者にも知らされず、掲載拒否される、というありえないことが起きた。2008年8月20日のことだ。その概要を伝えよう。

ぼくは2008年7月末か8月初め頃、琉球新報の「パンドラの箱を開ける時」の連載担当記者の名城知二郎から「上の方からの指示で新しい連載が予定されているので、そろそろ『パンドラの箱』を終えてくれないか」と連載終了を依頼された。「新しい連載」というのが嘘だとわかっていたが、ぼくはアッサリ「そうしよう」と言った。

ぼくの親友であった嘉数武編集長はその年の6月に販売局長に更迭されていたからぼくの支援者は編集局には一人もいなくなっていた。ぼくが自分の陳述で嘉数武の名を出すのはこれが最初だ。ぼくは親友の名誉を大切にしてきたのだ。

名城に、いつ頃まで続くか、と問われて8月一杯に終わると告げた。ぼくは「パンドラの箱178回」の「そして人生は続く」の②でやんわりと読者に告げた。「パンドラの箱の物語はこれで最後だし、ひょっとしたら、ぼくが君に語るのも、これが最後になるかもしれない。君に伝えたい物語はまだまだ山ほどある。だが、明日には天が裂け、地が割れるかもしれない。今、伝えねばならないことを君に伝えておこう。」そこで、ぼくが「そして人生は続く」で伝えたことはぼくが沖縄タイムス、琉球新報で発表した数々の物語を短くまとめたものだ。それは決して新資料ではなく、ぼくから読者への別れのメッセージ「心からの思い」をまとめたものだ。

従って181回の最終稿は「そして人生は続く」の一部であり、最後のメッセージ「心からの思い」を伝えたものであり、被告琉球新報がその最終稿だけを取り上げて、その8割が「新味がない」「焼き直し」などと非難するのはバカバカしい限りだ。

もし、被告が主張するように「本件契約では、初出の資料を用いて新連載を掲載することが契約内容であった」のなら、181回の最終稿だけでなく「そして人生は続く」の全てが初出の資料ではないのだから、「新味のない、焼き直し」という理由で掲載拒否ということになる。だが事実はそうではなかった。

被告が恐れるのはただ一つ「赤松嘉次さんと梅澤裕さんが集団自決を命じたことはない」という記述だ。

近日中に、ぼくの秘書で連絡係の屋比久吉広の証言と名城知二郎とのEメールの内容で必要なものを全て提出して最終稿掲載拒否の詳細な経緯を具体的に示そう。